

# 札幌市立南の沢小学校の取組

(学校ホームページ <http://www.minaminosawa-e.sapporo-c.ed.jp/> )

## 1. 学校の実態・地域性等

藻岩地区西側の台地に位置し、山・丘に囲まれた住宅地。開校以来「大自然と共に生き」を学校教育目標とし、豊かな自然環境を生かした教育活動を行ってきた。1940 年代に日本で初めてラベンダーを栽培した地としても知られる。

雪に関する学習活動は、「雪をとおして札幌らしさを学ぼう」をねらいとして、各学年のスキー学習、東海大学光風園のスノーシュー探検（4年）、冬の滝野宿泊学習（5年）、全校雪踏み（学校行事）、雪と親しむ児童集会（児童活動）などを行っている。その中から、「冬の滝野宿泊学習」の取組について報告する。

## 2. 実践単元名

5年 学校行事（集団宿泊・旅行的行事） 「冬の滝野宿泊学習」（11 時間扱い）

## 3. 目標

スノーキャンドル作り、スノーシューオリエンテーリングや歩くスキーツアーの体験といった活動を通して雪国札幌の自然に親しみながら、仲間と共に健やかな体と心を育成する。

## 4. 取組の様子

実施日は、2月13日、14日の2日間。3学期が始まるとすぐに、活動のテーマを決め、各係に分かれて計画を進めた。「雪」に関わる3つの活動は「野外活動係」が企画し、「キラキラかがやくスノーキャンドル」「冬の自然を楽しむスノーシュー」「前に進んで歩くスキー」の3班に分かれて計画・進行を行った。

### (1) スノーキャンドル作り

1日目の10時から、各クラス8班、計24班に分かれてスノーキャンドル作りを行った。「くわのみ広場」の円周に沿って各班がスノーキャンドルの設置場所を確保した後、スコップ、シャベル、プラスチックバケツ、コンテナなどの道具を用意し、作成を開始した。

バケツやコンテナに雪を詰め、プリンよろしく逆さまにして空け、キャンドルの本体を作る班が多かったが、数日続いた低温のため雪質はさらさらで固まりにくく、ペットボトルに入れた水で湿らせながら行っていた。その他、雪玉をたくさん作り、ドーム状に積み上げて作っていた班、他校が捨てていった着色された氷の塊をちゃっかりと利用していた班もあった。



本体ができると、思い思いにデコレーションを施した。笹の葉を刺してウサギの耳に見立てたもの、角や

牙を付け、鬼の顔を模したものの、城をかたどったもの、ミッキーマウスをイメージした3つの雪玉を乗せたものなど、1時間半後には24班すべてが個性的なスノーキャンドルを作り上げ、夜の点灯を待つことにした。

19時、キャンプファイヤーを終えた足で再び「くわのみ広場」に集合し、配られたろうそくを設置、点灯した。広場の照明がゆっくりと落とされると、24基のスノーキャンドルの明かりだけが輝き、児童の歓声が響いた。それは、雪とろうそくの炎だけで幻想的な世界を作り上げた児童の心からの喜びの表現だったと思われる。そして、何気なく夜空を見上げると、そこにはプラネタリウムでしか見たことのないような鮮やかな星空が広がっていた。わずか30分ではあったが、雪国の厳しい寒さ中にある美しさにたっぷりと浸ったひと時となった。



## (2) スノーシューオリエンテーリング



スノーシューオリエンテーリングは、1日目、13時から行なった。

まず、「青空広場」でスノーシューの装着をした。毎年、本校では、4年生の「さわっ子タイム」（総合的な学習の時間）で、スノーシューを履き、冬の東海大学光風園を探検する活動を行っており、ほとんどの5年生は経験済みであるが、靴をベルトでしっかりと固定するのを上手にできない児童も少なくなかった。

活動するコースは、通称「カケスコース」。ゆっくり歩いて1時間ほどでゴールできるシュートコースだ。「森の交流館」から「森見の塔」まで全員で歩き、そこからは班ごとに時間差でスタートした。途中に設けられた3つのチェックポイントに立つ担当の教員に班のナンバーを告げることが唯一のルールである。

スタート直後からほとんどの班が、踏み固められたコースを通らずに、深雪の斜面をショートカットして降りてくる。「未開の地」でも容易に開拓していけるのがスノーシューの醍醐味である。

キツネの足跡を見つけた男児は、その跡を追いかけ、急な斜面を登っていった。また、雪上に小さな虫を発見し、「ハサミムシだ！」と驚く児童もいた。後日調べてみると、それはハサミムシではなく「セッカイカワゲラ」という夏は池や川など水中で過ごし、冬に成虫となり雪中で活動する珍しい昆虫であることが分かった。



斜面下を通る友達に雪玉を投げる子、斜面を前転で転げ降りる子、渴いたのどを雪で潤す子、頭だけ残して雪の中に埋もれる子…。予定の16時まで、たっぷりと雪と戯れ、雪に親しみ、新たな冬の魅力を発見することができた活動であった。

## (3) 歩くスキーツアー体験学習 ～インストラクターによる指導～



2日目のメインイベントは、歩くスキーツアーだ。これは、札幌市観光文化局スポーツ部主催の「青少年山の家における『歩くスキー出前授業』」を利用し、クロスカントリースキー競技の指導者を講師に行った。

3クラスを各2班、計6班に分け、それぞれにインストラクターがつき、指導に当たってくださった。スノーシューとは異なり、歩くスキーはほとんどの児童が初体験とあって、室内での用具の着脱

の説明から真剣に話を伺っていた。

体のサイズに合った靴、ストック、スキー板を選び「青空広場」で装着。履きなれたゲレンデスキーとは違う感覚に、あちらこちらから「わっ」「きゃっ」といった声が飛んでいた。

3kmある「エズリスコース」に出る前に、まず、「風のはらっぱ」で準備運動や用具に慣れるための運動をじっくりと行った。ゲレンデスキーとは異なり平地で転倒する子が続出したが、「転ぶほど上手になるよ」というインストラクターの言葉を励みに練習を重ねていった。

そして、いよいよコースへ出陣。山側を一行で歩くことをルールに、インストラクターの後をついていく。歩くスキー特有の滑走面に彫られた溝のため、上り坂は難なく進むことができる。しかし、下り坂は、踵がスキー板に固定されていないためとても不安定である。恐る恐るすべる児童にインストラクターは優しく声をかけ、導いてくれた。昼食をとる東口休憩所までは、3つの下り坂があったが、最後の坂に挑戦するときには、多くの児童が上達振りを披露してくれた。

昼食後は、インストラクターによるデモレースを行った。クラシカル走法、フリー走法の違いを教えていただいた後、児童の代表によるレースを楽しんだ。

児童にとって冬景色を楽しむ余裕はまだままだなかったようだが、貴重な冬の体験となった。

## 5. 研究のまとめ

2日間を通し、児童は、充実した雪国ならではの活動に、仲間と共にとっぷりと浸ることができた。本校では、ここ数年来、あえて冬に滝野宿泊学習を行っているが、その意義、有効性を改めて確認することができた。

今後の冬の滝野宿泊学習の課題として、以下の2点を挙げる。

まず、スノーシューオリエンテーリングについて。コース上で発見しそうな動植物やその痕跡について事前学習でふれておくことで、さらに児童の興味・関心は膨らむだろう。さらに、チェックポイントでクイズなどに挑戦させることでゲーム的な面白さも増すので、次年度の活動につなげていきたい。

次に、歩くスキーツアーについて。今回は、市観光文化局スポーツ部によるインストラクターの派遣により効果的な学習となったが、この事業は現在のところ10校程度の実施に限られている。次年度以降、実施校数の拡充及び同様の事業などの充実に期待する。

今回の実践研究を機会に、本校の教育課程における雪に関する学習活動の位置付けをさらに検討し、より実りある活動を推進していきたい。

